

岩井千尋先生のご退任にあたって

社会情報学部 教授 吹春俊隆

私は2011年4月に社会情報学部採用されて広島から転任してきましたのですが、その時、岩井先生は前年4月に関西から転任されて社会情報学部所属しておられました。私の採用審査時の選考委員長というので、2010年からお付き合いをいただけてきましたし、教授会では私はいつも、1歳年上の先生の横に「侍らせて」いただきました。最初に、自宅に電話を頂いた時から、気さくな、親近感を抱かせる雰囲気を持っていらしたからです。私の前に故清水先生、岩井先生の前（清水先生の隣）には大宮先生、清水先生の横には村川先生が教授会の定席で、いつも楽しい話で盛り上がり、私もすぐに社情に溶け込むことができました。また、相模原キャンパスに赴任してすぐに、先生は現役のジャズ・トランペッターであることが分かり、趣味が一致するので先生と一緒に時は、必ずジャズの話になりました。といっても、研究室でジャズのCDを聞くだけの私とは格が違います。先生は母校－土佐高校－のブラスバンドを率い、トランペットにより野球部を鼓舞して、甲子園で母校を準優勝にまで駆け上らせました。進学された神戸大学ではトランペッターとしてジャズ研を率い、卒業後も大手銀行において、堂々と2足の草鞋を履いてジャズ喫茶やバーでコンボを率いていた猛者なのです。

父上も姉上も大学教授であったというアカデミックな家庭環境の故か、そのような2足草鞋生活に飽き足らず、企業に勤めながら博士号を取得されて、カエルの子はカエルの例え通り、先生ご自身も大学教授へ転身なさいました。銀行畑出身というので本学部ではファイナンスの授業を担当されて、ゼミの多くの卒業生は金融機関に進むのが多いと聞いています。また、先生のゼミ生指導は、厳しいだけでなく、その面倒見の良さで知られています。ゼミ合宿で学生の要望に応え、北海道までも学生に付き合い、厳しい指導と懇談に夜を徹して明け暮れると聞いて、私などは、いつも反省させられたものです。ゼミ志望学生が多く、ゼミ生の数を絞るのに苦労されているのをよく伺いました。卒業式後の祝賀会における岩井ゼミの盛り上がり方は今後も語り草となるでしょう。

先生と一緒にいると、一見ソフトで笑顔の絶えないお顔の裏には「いごっそう」の血が脈々と波打っているのを感じました。原発問題に怒り、不正を憎む性向により、先生の最近の研究テーマは企業の社会的責任を重視するコーポレート・ガバナンスに集中していました。2013年に社会情報学部主催の公開講座を開催するにあたり私は責任者を仰せつかったのですが、先生に相談すると、すぐに「再び原発問題を考える」ではどうかという提案を頂きました。パソコンに可愛いお孫さんの写真を取り込んでいらして、よく拝見させていただいたのですが、次世代への責任という問題の大きさを実感されているのです。いささか腰が引けていた私でしたが、魚住先生や佐藤先生、さらに宮川先生のご協力もあり、何とか実行できたのは岩井先生の強力なサポートのおかげでした。

教授会が緊張した状況になるとジャズの即興演奏宜しく、ちょっと一息入れる「間」を醸し出す先生の絶妙の手練手管がもう見られなくなります。先生は「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」とおっしゃっていますが、退任後はトランペッターのみならず講演活動を本格的に再開される予定だと伺っています。本学部か、あるいはどこかの会場で老兵同士の再会を楽しみにしています。